

論 文

清末の内モンゴル帰化城トゥメド地域における
近代学校教育の開設・運営

— 満洲人旗人官僚によるモンゴル人向け学校教育 —

Establishment and Management of the Modern School Education
in the *Guihuacheng Tümed* Mongol Region during the Late *Qing* Period

— The School Education for Mongolians by the Manchu Bureaucrats —

アローハン (阿 如 汗)

(神戸大学大学院国際文化学研究科/日本学術振興会特別研究員DC2)

ARUUHAN

(Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University / Research Fellow of the JSPS DC2)

キーワード: 清王朝末期、帰化城トゥメドモンゴル、満洲人旗人、近代学校教育

Keywords: Late *Qing* Dynasty, *Guihuacheng Tümed* Mongol, Manchu Bureaucrats, the Modern School Education

目 次

はじめに

1. 帰化城トゥメド地域における近代的学堂の改編と創設
 - 1.1 初期の近代的学堂の改編と創設
 - 1.2 貽穀と文哲瑾の提案による最初の蒙小学堂
2. モンゴル人向け学堂の運営とその経費調達
3. モンゴル人向け学堂の教科内容と管理体制
 - 3.1 モンゴル人向け学堂の教科内容
 - 3.2 モンゴル人学生に対する管理体制

結論

はじめに

帰化城トゥメド地域とは、現在の内モンゴル西部にあるフフホト（呼和浩特）市周辺に位置する地域である。この地域は、内モンゴル東南部に位置するハラチン地域と並んで、近代内モンゴルに

おける代表的な知識人輩出地として有名である。この両地域は中華民国期以降の内モンゴル政治上で大きな役割を果たした北平蒙蔵学校の主な学生募集対象地域でもあったと考えられる¹。

両地域出身の知識人として例えば、内蒙古人民革命党（内蒙古国民党）の創設者である白雲梯（ハラチン中旗）〔札奇斯欽2007：264-265〕、『蒙古盟部旗組織法』を起草し、中華民国政府に対してモンゴル各地域の法律上の地位の保障を求め、貴族爵号や世襲制の廃棄を求めた呉鶴齡（ハラチン右翼旗）〔札奇斯欽2007：266-267〕らはハラチン出身の知識人である。その他に、恩和布林（ハラチン右翼旗）、金永昌（ハラチン右翼旗）、熙凌阿（ハラチン左翼旗）、李芳（ハラチン左翼旗）、張樹桐（ハラチン中旗）らは中華民国期の参議院に参加したハラチン出身の有力者である〔張2012：397-440、札奇斯欽2007〕。また、蒙蔵学校における最初のモンゴル人共産党員である多松年、内モンゴル自治区を設立したことで有名なモンゴル人共産党員である烏蘭夫（ウランフー）、内蒙古軍官学校の創設に努めた李裕智〔孟2010：23-28〕、同盟会会員である雲亨、李苑林、温廷相、李正樂、王定圻〔王慧2005：22〕らは帰化城トゥメド出身の知識人である。その内でも特に、近現代内モンゴルを代表する知識人の一人、烏蘭夫は、北京にあった蒙蔵学校を内モンゴルにおける「近代革命の揺籃」であると述べている〔楊2013：20、159、269〕。したがって、中華民国期の蒙蔵学校や内モンゴル知識人輩出の問題を研究する前段階として、これらの知識人が学び卒業したモンゴル人向けの初期の学校システムがいかに形成されたのかという問題について、清末の学校教育が開始される時期における上記両地域を研究する必要が生じるであろう。

そもそもこの両地域は最も早く漢人が流入してモンゴル人の定住化が始まった地域であったが故に、学堂の創設も比較的早く始まったと考えられるが、近代学校教育の振興に当たって、両地域の権力者たちが主役を演じたこともまた確かであろう。

例えば、清王朝末期の光緒28（1902）年から光緒29（1903）年にかけて、内モンゴル・ハラチン右翼旗の旗長グンサンノルブ（Güngsangnorbu, 貢桑諾爾布）が崇正学堂（töb-i erkimlekü tangkim）、守正武備学堂（töb-i sakiqū tangkim）、毓正女学堂（töb-i kömüjigülkü tangkim）という3つの学堂を創設した。この3つの学堂は内モンゴル初の近代的学堂としてよく知られており、「ハラチン三学」と称されてきた。同時に創設者のグンサンノルブも内モンゴルへ最初に近代学校教育を導入した人物として賞賛されてきた。これらに関する研究は数多く発表されている。筆者も拙稿アローハン2016aにおいて、「ハラチン三学」創設時の日本陸軍の意図など、その軍事的な背景を明らかにし、拙稿アローハン2016bにおいて、清末の「新政」期におけるハラチン地域の学堂創設事業やグンサンノルブの対応について検討した。

しかしその一方で、帰化城トゥメド地域に関しては詳しい研究が少なく、綏遠城將軍貽穀らの主導で新式学堂教育が導入されたことのみがよく知られている。先行研究として例えば、李2000と劉櫻2011では、貽穀が新式軍事教育に貢献し、開墾を通して清朝政府の財政危機を緩和したと賞賛し

¹ 1913年に中華民国の北洋政権期において、清朝時代の威安宮学、唐古忒（タンゲート）学、托忒（トド）学と、理藩院が建てた蒙古学堂をもとにして、蒙蔵学堂が設立され、後に、北平蒙蔵学校と改称された。現在は中央民族大学附属高校という名称になって残っている。ただし中華民国当時、この学校は北京の西単小石虎胡同にあったが、現在はそこから移っている。この蒙蔵学校の設立やそれが政治史上において果たした役割に関しては、筆者は別稿を準備中であり、学生募集対象地の問題についてもそこで詳しく述べることにしたい。

ている。王慧2005 (内蒙古大学修士論文) では、清末から抗日戦争期までの帰綏地域²における学校と学生運動の展開を検討した上で、回想録や地方誌のみに基づいて清末の帰化城トゥメド地域の学堂創設に関する概説を述べている。また、劉麗君2004 (内蒙古師範大学修士論文) も、清朝時代の帰化城トゥメド地域における教育機構や新式学堂について、地方誌に基づいて短くまとめるのみである³。これら帰化城トゥメド地域の近代学堂に関する従来の研究を見ると、回想録や地方誌を利用して、学堂創設の時期、学堂の規模などを、簡略にかつ地域単独の視点で叙述するのみに留まっている。モンゴル人向けの学堂も創設されていたことが確認できるため、現在の課題としては、帰化城トゥメド地域におけるモンゴル人向けの近代学堂開設を可能にした制度的根拠が何であったのか、その後どのように展開したのかという問題を、清朝政府と内モンゴルとの対応関係という側面から、より詳しく解明せねばならない。

そこで、本稿では、清末の帰化城トゥメド地域における近代学堂の設立運営の具体相をより詳しく考察し、モンゴル人向けの学校教育の一様態を明らかにする。本稿では、主に、中国第一歴史档案館所蔵の档案史料⁴、内モンゴル自治区トゥメド左旗档案局所蔵の档案史料⁵を利用する。本稿で引用する史料は全て筆者が日本語訳したものである。引用史料中の〔 〕内は、史料に元から存在していた補足を示す。()は筆者による補足を示す。

1. 帰化城トゥメド地域における近代的学堂の改編と創設

1.1 初期の近代的学堂の改編と創設

清代の帰化城トゥメド旗は、内属モンゴル地域であった。16世紀の北元時代⁶にアルタン・ハーンが帰化城周辺を根拠地として勢力を拡大していた。アルタン・ハーンの曾孫であるオムボが清朝時代初期に反乱を起こしたために、帰化城トゥメドには外藩モンゴルのような世襲旗長が置かれず、旗民は理藩院から直接派遣されてきた旗人官僚である都統や副都統たちによって管理されていた。このような旗長のいない旗を総称して、一般に内属モンゴルと呼ぶ。帰化城周辺地域のモンゴル人は帰化城トゥメド左旗と右旗に編成されていた。乾隆年間に、清朝政府が帰化城の北東隣に「綏遠城」を築き、西部内モンゴルの防衛を担当する八旗の駐留地とした。

帰化城トゥメド地域では早くも北元時代から山西省北部の漢人農民が大量流入していたため、彼らを管理する目的で、清末には帰化城トゥメド両旗の内部に、帰化城、薩拉齊、托克托城、和林格爾、清水河という5つの庁が設置された〔曉克・于永發・王奎元2008:294〕。これによって、モンゴル人

² 「帰化城」は現在の内蒙古自治区フフホト (呼和浩特) 市の旧城地区である。清代に入ると、清朝政府が帰化城の北東隣に「綏遠城」を築き、この帰化城と綏遠城があわせて「帰綏」と呼ばれた。

³ これら4点の修士論文は、ウェブページ「中国知網」(<http://www.cnki.net/>)に掲載されている論文をダウンロードした。

⁴ 2014年の12月中旬から2015年の1月初旬、そして同年3月に筆者が調査して入手した档案史料である。

⁵ 2013年の9月、2014年の9月、そして2015年の2月末から3月初旬と7月末から8月初旬という計4回に渡って筆者が調査して入手した档案史料である。

⁶ 1368年に元王朝がモンゴル高原へ中心を移した後、後金のホンタイジが内モンゴルのチャハル部からハンの称号とフビライの玉璽 (元朝皇帝の印鑑) を献上された1635年までを一般に北元時代と呼ぶ。

は旗に、山西省北部方面から移住してきた漢人は斤に、それぞれ管理されるという「一地両府」の制度が形成された。

中国本土に接するハラチン地域と帰化城トゥメド地域は、内モンゴルにおいて漢人流入が最初に始まった地域である。そのうち、帰化城トゥメド地域においては、漢人の移住は前述のように、北元時代末期に始まり、清代の康熙27(1688)年頃には既にかなり大きく進んでいた[矢野1925:110]。清末における「新政」のうちのモンゴルに関係する「移民実辺政策」が帰化城トゥメド地域で実施される際、光緒29(1903)年に満洲人旗人貽穀が綏遠城將軍に任命され、漢人移住を管理する蒙旗墾務大臣をも兼任した。光緒32(1906)年から綏遠城將軍兼蒙旗墾務大臣の貽穀が始めた「官売蒙地」(政府による蒙地売却)によって、帰化城トゥメド両旗内部における土地の売却が始まり、漢人移住をさらに促進した。これによって、もともと多かった漢人の人口が圧倒的多数を占めるようになり、彼らの所有する土地も増えていった[暁克・于永發・王奎元2008:298]。

貽穀ら清末の旗人官僚たちは、帰化城トゥメド地域において、土地開墾を進める一方で近代学堂の改編や創設にも関わっていた。まず光緒27(1901)年における清朝政府の命令⁷によって、帰化城トゥメド地域において、元々あった三つの書院が下記のように、順次それぞれ学堂に改編された[王慧2005:9]。光緒29(1903)年に帰綏道の朴寿が古豊書院(漢人向けの書院)を帰綏中学堂へと改編し、光緒30(1904)年に綏遠城將軍貽穀が長白書院(啓秀書院、満洲人向けの書院)を綏遠中学堂に改編し、光緒32(1906)年には帰化城副都統文哲珪が土黙特官学(啓運書院、モンゴル人向けの書院)を蒙小学堂へと改編したことが分かっている[劉麗君2004:8-9]。これが最初の蒙小学堂(モンゴル人向けの小学校)であり、翌光緒33(1907)年に土黙特高等小学堂⁸と改名される。先に漢人向け、満洲人向けの学堂ができて、後からモンゴル人向けの学堂ができたことが分かる。帰化城トゥメド地域の近代学校教育の振興において功績を残した官員の中では、上述した綏遠城將軍貽穀と光緒32(1906)年に赴任した帰綏道尹胡孚宸が特に有名である[王慧2005:20]。ここで先にその後の学堂数の変化を追加して述べておくと、この後も、以下のように次々と学堂が創られていった。

学務股長參領都 …土黙特第二初等小学堂を増設し、この冬の月の二十六日⁹に開学する予定である。私塾に通っている本旗のすべての官員兵丁の子を、必ず本旗第二初等小学堂に入学させてほしい。第二小学堂を小東街関帝廟内¹⁰に創設する予定で、校舎も用意している。私塾に通っている二十一名の学生は早めに入学してほしい。(中略)兵司¹¹。 光緒三十四(1908)年十一月十八日¹²

⁷ 清朝政府は「各省の凡ての書院について、省城にある書院を大学堂へ改編し、府や直隸州にある書院を中学堂へ改編し、州県にある書院を小学堂へ改編し、蒙養学堂を多数設置せよ。教育内容は四書五経を主とし、歴史や国内外の政治学芸を補佐内容とせよ」と命じた。王慧2005:9を参照。

⁸ 1915年に土黙特高等小学校と改名された。冒頭で述べた烏蘭夫ら帰化城トゥメド地域の知識人はこの土黙特高等小学校で学んだ後、蒙蔵学校に進学したのであった。この高等小学校は、1931年に土黙特旗小学校と改名され、1978年から土黙特学校と改名される。郝1989、孟2010、王・路2008:52等を参照。

⁹ 11月か12月のことであろう。

¹⁰ 帰化城の内部だと思われる。

¹¹ 帰化城副都統の下に戸司と兵司という部所が置かれており、その内、兵司が学堂を管理していた。

¹² 帰化城副都統の下に置かれていた兵司の学務股長參領都宛咨文。帰化城トゥメド左旗檔案局所蔵の漢文史料。

…土黙特旗に現在高等小学堂と初等小学堂を三ヶ所創設している。…しかし、近隣の他の鎮や村からこれらの学堂に通うのはやはり遠く、学生が通えない状況に置かれているため、帰化城内に、半日学堂を増設してほしい。…右の通り、兵戸司¹³、学務股と十二の参領が依頼する。宣統元 (1909) 年正月¹⁴

上記史料によると、光緒34 (1908) 年11月か12月頃に、帰化城トゥメド旗内の私塾に通っている官員兵丁の子を対象として帰化城の関帝廟内に第二初等小学堂が設けられたようである。第一初等小学堂とは、上述の光緒32 (1906) 年に創設された蒙小学堂 (土黙特高等小学堂) の人数が増えた後、帰化城の文昌廟内に創設した学堂を指す (劉麗君2004: 8)。翌宣統元 (1909) 年には、学堂に通うのが不便な遠方からの学生を対象として半日学堂が増設されたわけである。その他、薩拉齊、托克托城、和林格爾や清水河等トゥメド周辺でも次々と近代学堂が創設されていた [高賡恩纂 (清): 472-482]。帰化城には、宣統3 (1911) 年までに満洲人向けの学堂、モンゴル人向けの学堂、漢人向けの学堂や回民向けの学堂を合わせて、合計10箇所もの学堂が創設されていたことが分かっている [王慧2005: 9]。その内、モンゴル人向けの学堂と断定できるのは、土黙特官学を改編して創られた蒙小学堂 (土黙特高等小学堂)、第一初等小学堂、第二初等小学堂、及び光緒32 (1906) 年に貽穀が改編した陸軍学堂¹⁵ の陸軍第二營 [劉櫻2011: 42] である。

1.2 貽穀と文哲瑋の提案による最初の蒙小学堂

以上のように、蒙小学堂や中学堂創設の大まかな概容は明らかになっているが、創設時の具体的な情況、特に、モンゴル人向けの近代学堂開設を可能にした制度的根拠が何であったのかはほとんど明らかになっていない。そこで、以下に最初の蒙小学堂創設時の経緯を細かく検討していきたい。上述した第一番目の蒙小学堂設置や陸軍学堂へのモンゴル人の入学に際しては、光緒32 (1906) 年6月に、綏遠城將軍貽穀と帰化城副都統文哲瑋が下記のように上奏したことが確認できる。

土黙特旗の巡警費の支給を停止させ、それを陸軍の手当、学堂の手当や学堂の経費にしようと
考えて、貽穀が上奏します。

奴才貽穀、奴才文哲瑋が跪いて願います。

上奏することは、土黙特旗への巡警費支給を停止してもらった後、それを陸軍の増員や給与の
増額に使用させてもらい、武備学堂の手当、蒙小学堂の経費などとさせてもらいたく思うこと
です。恭しく摺を以って願います。

皇帝に審査していただくことを願います。(私が) 調べたところ、帰化城土黙特旗では、一百名
の巡警がいて、常に毎年三千両の銀を支給していますが、(巡警のことは) 日が経つにつれてよ

[移請兵司転飭在私学就読之学生一併転送第二初小的咨文]。档案番号80—12—44。陳志明主編 (2006: 44) にも収録されている。

¹³ 兵司と戸司という意味。

¹⁴ 兵戸司、学務股と十二の参領の各佐領宛劄文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「通論兵戸司学務股併十二参領転飭各佐筹設半日小学堂」。档案番号80—12—49。陳志明主編 (2006: 46) にも収録されている。

¹⁵ 光緒27 (1901) 年に綏遠城將軍信格が清末の新政に従って創設した武備学堂を同32年に改編した。

こしまが生じ、名実相伴いません。奴才貽穀が昨年の九月に上奏して請求したこの（巡警）兵の給与を一切停止させ、それを別の要に調達したく存じます。

…土黙特の下士卒から十名を選んで、綏遠城陸軍学堂に入学させ、そこで（陸軍学堂で）授業を受けさせます。陸軍の学生一人につき手当として毎月四両の銀を交付するので、一年間で四百八十両の需要があります。それに加えて、一年間における買い物、衣服や雑費に約一百二十両の需要があるので、この分と交付する手当で年間六百両の需要となります。このような理由で巡警費の支給を停止させ、その中から前述の陸軍学堂に（毎年）四百両を交付し、残りの銀を新設の蒙小学堂の経費としたく存じます。（後略） 光緒三十二（1906）年六月初九日¹⁶

貽穀と文哲瑛は、巡警業務に日々よこしまが生じ、名実相伴わなくなったので、巡警費の支給を停止させて、その費用を陸軍学堂や蒙小学堂に交付するようにしたいと上奏している。上記史料の「土黙特の下士卒から十名を選んで、綏遠城陸軍学堂に入学させ」という記述から見ると、この陸軍学堂とは上述した貽穀が改編した陸軍学堂の陸軍第二営を指している。ここで特に、陸軍学堂においてモンゴル人陸軍学生の増員、給与の増額や軍隊の制服の購入といった軍隊編成を重視すべきことを強調している。蒙小学堂を新設する件では下記のように迫伸している。

貽穀、文哲瑛片¹⁷

追加して述べること（は下記の通りです）。土黙特旗は辺疆地帯にあり、（その）モンゴル人を治めたいですが、（モンゴル人は）人情が愚鈍で、すべて（のモンゴル人）が素朴に見える上に、官職に就いている者も文字が読めません。奴才我々がこのようなモンゴル人を治め、防備を固めるため、綏遠城の（学堂創設の）方法の通り¹⁸に、（土黙特旗にも）蒙小学堂を創設することを、昨年の九月から検討しています。ただ、学堂を開設する経費が難しい問題です。…帰化城内で土黙特蒙小学堂一つを創設したく存じます¹⁹。学生四十名を集めて、満蒙漢文及び浅い内容の（浅近的）教科等を教えたいです。手当として、学堂の監督一名に毎月五両、司事一名に毎月三両、漢文教習一名に毎月十二両、満蒙文教習一名に毎月七両、毎年合計三百二十四両を支給する予定です。学生四十名のうちの一人につき毎月一両二銭、すなわち毎年合計五百七十六両を支給する予定です。これらが（毎年）合計銀九百両の需要となります。（そのため、）巡警費の支給を停止させ、その中から四百両、（中略）また軍器補修項目の中から五百両を、蒙小学堂に経費、手当として交付したく存じます。…書籍購入や日常の雑費は学堂に解決させたく存じます。（後略） 光緒三十二（1906）年六月初九日²⁰

¹⁶ 貽穀と文哲瑛の上奏文。中国第一歴史档案館所蔵の漢文史料。「奏為土黙特停支巡警兵餉銀請移作陸軍加餉學生津貼学堂經費事」。档案番号03-6175-010。この内容は沈雲龍編・貽穀著（1974：249-251）にも収録されている。

¹⁷ 正奏に対する片奏、すなわち、追加した上奏文の意。

¹⁸ この時点で綏遠城内に開設されていた前述の綏遠中学堂のことを指すと思われる。

¹⁹ 最初の蒙小学堂を指す。

²⁰ 貽穀と文哲瑛の上奏文。中国第一歴史档案館所蔵の漢文史料。「奏為筹建帰化城土黙特蒙小学堂情形事」。档案番号03-7218-004。この内容は沈雲龍編・貽穀著（1974：253-254）にも収録されている。

この部分では、設立目的とともに予定される運営経費を述べている。この記述から見ると、蒙小学堂を設立するのは、文字の読めないモンゴル人に満洲文字やモンゴル文字、さらには漢文をも教えることを通して、モンゴル人の識字力を高めるためであった。こうして、モンゴル人の識字力を高めれば、モンゴル人を、治めやすい新しい国民として養成することにつながり、辺境を守るためにもなるという主旨が窺える。後述するように、貽穀と文哲琿の提案は許可され、光緒33(1907)年正月からこの蒙小学堂が正式の学堂として認可される。

以上のように、帰化城トゥメド地域では、北京から派遣された旗人官僚たちが新しい国民を養成することによって辺境地帯の安定を確保するという施策を通して、近代学校教育をモンゴル人の間に広げようとしていた。

前述したグンサンノルブによるハラチン右翼旗の3つの学堂は日露戦争後運営が困難となり、ハラチン左翼旗での学堂創設もいろいろな困難を抱えていた²¹。それに対して、帰化城トゥメド地域では次々と学校が創設されていたことがわかる。先行研究によって考察されている財政上の状況から見ると、帰化城トゥメド地域では清末に、財政上の困難を克服するために、石炭の税金を大幅に増やしていたようである。石炭税に次いで「六成地租」²²が帰化城トゥメドの主な財政源だったと言われている [烏仁其其格2007: 227-236]。また、上記史料で述べる巡警費は「六成地租」から支給されていた [烏仁其其格2007: 249] が、貽穀らの提案によってそれが停止され、蒙小学堂に支給されるようになる。そこで、以下では、財政状況などの面から初期の学堂経営の実態をより詳しく見てみよう。

2. モンゴル人向け学堂の運営とその経費調達

上述の貽穀と文哲琿の提案によって、帰化城トゥメドに蒙小学堂が初めて創設された。以下では、貽穀と文哲琿の提案が許可された後、帰化城トゥメドから理藩院度支部に蒙小学堂の経費支出の詳細について報告した一連の文書を利用して、この学堂の運営状況を考察してみたい。まず、帰化城総管旗庫事務掌戸司關防署の参領達恒泰と帰化城管理旗庫事務参領德楞額らが、帰化城トゥメドの学堂を管理する兵司に、蒙小学堂を設立するための経費、手当の金銭に関して、下記のように報告している。

最初の儲蓄に関して、旗庫が詳しく取り調べた報告書を移送する呈文。土黙特旗蒙小学堂を設立するための経費、手当の金銭に関することについて、光緒三十二(1906)年十二月の間、戸部に報告し、審査して精算するまでに、その年の年末の残金の実額は三十四両二錢八分四厘であることを上奏しました。(皇帝に)上奏して裁可を得たことに照らしその通り、以下のように処理します。光緒三十三年に正税より巡警費を停止させ、その中から蒙小学堂に経費、手当と

²¹ ハラチン左翼旗における学堂の創設に関しては、アローハン2016bを参照されたい。

²² 六成地とは、黄河の河道が移り変わったことによって乾上った土地である。包頭の南にある黄河南岸より東に広がって、准噶爾旗の領地に接する。この六成地の開墾地から徴収する租税を「六成地租」と言う。

して、四百両を、また軍器補修項目の中から銅錢六百吊²³を確実に提供しました。本年の七月下旬に、(この六百吊を)銀一両が銅錢一千一百三十一吊相当として、銀五百三十両五錢三厘九毫に換金しましたので、以上本来の残金を引き継いだり、新しく引き受けたりした総額銀九百六十四両七錢八分七厘九毫を、蒙小学堂の監督司事、滿蒙漢教習や学生らに交付しました。光緒三十三年(1907)年正月から十二月末までの十二箇月間の手当として銀九百両を交付した分を除いて、本年の年末になると、残金の実額は六十四両七錢八分七厘九毫です。以上に関して、元の担当者が残金の実額に照らして、帳簿を作るべきではありませんか。そして、蒙小学堂が四柱帳簿を呈送し、それぞれ三冊を移送します。…貴司が以上のようにお取計らい下されたく存じます。 光緒三十三年(1907)年十二月²⁴

この報告書から見ると、貽穀と文哲珩が提案した通りに、巡警費の支出を停止し、その中から蒙小学堂に経費、手当として400両を、また軍器補修項目の中から銅錢600吊を提供したことがわかる。前述の史料によると、貽穀と文哲珩はもともと軍器補修項目の中から800吊を提供するように提案していたので、これだけは提案通りではなかった。また、この報告書は、蒙小学堂の光緒33(1907)年正月から12月末までの12ヶ月間の支出状況を反映するものでもある。

この報告書を、「…その時点で職員が既に取り調べたところ、異常なしであったので、清算書各三通のうちから一冊を審査用に供します。上述の清算書各二通を理藩院度支部に奏呈し、審査して精算するようにお願いしています」²⁵と述べて、帰化城トゥメドの学堂を管理する兵司が光緒33(1907)年12月10日に理藩院度支部に報告した。その際に、添付された学堂経費支出の詳細は以下の通りである。

帰化城總管旗庫事務掌戸司關防署參領達恒泰、帰化城管理旗庫事務參領德楞額らが、土黙特旗で設立した蒙小学堂の経費、手当の金銭に関することで報告します。光緒三十二年(1906)年十二月の間、戸部が審査して帳消しにするまでに、その年の年末の残金の実額は三十四両二錢八分四厘でした。

上奏して裁可を得たことに照らしその通りに以下のように処理します。光緒三十三年に正税より巡警費の支出を停止し、その中から蒙小学堂に経費、手当として、四百両を交付します。

また軍器補修項目の中から銅錢六百吊を、確実に提供しました。本年の七月下旬に、(この六百吊を)銀一両が銅錢一千一百三十一文相当として、銀五百三十両五錢三厘九毫に換金しました。

以上の総額九百六十四両七錢八分七厘九毫を元の担当者が(以下のように蒙小学堂に)発給しました。

蒙小学堂の監督一名に毎月七両を支給し、光緒三十三年正月から十二月末に至るまでの十二箇

²³ 吊は中国で銅錢1000枚(文)を意味する。

²⁴ 參領達恒泰と參領德楞額らの帰化城トゥメド兵司宛呈文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「呈請咨報土黙特蒙小学堂経費津貼銀出入各数」。档案番号80—12—41。

²⁵ 同上。

月で合計 銀八十四両

蒙小学堂の満蒙文教習の一人に毎月七両を支給し、光緒三十三年正月から十二月末に至るまでの十二箇月で合計 銀八十四両

蒙小学堂の漢文教習の一人につき毎月十二両支給する光緒三十三年正月から十二月末に至るまでの十二箇月で合計 銀一百四十四両

蒙小学堂の学生四十名の一人につき毎月一兩二錢を支給し、光緒三十三年正月から十二月末に至るまでの十二箇月で合計 銀五百七十六両

以上合計銀九百両を支給しました。

以上の通りに実行した後の残金の実額は六十四兩七錢八分七厘九毫です。

光緒三十三年 (1907) 年十二月²⁶

この蒙小学堂の経費支出の詳細から見ると、1907年時点で蒙小学堂には学堂を管理する監督1名、満洲語とモンゴル語を教える教師1名、漢文を教える教師1名が雇用されていて、40名の学生がいたことが窺える。また、学堂の監督や教師の給与の金額はそれぞれ異なっていた。蒙文教師に毎月7両を支給していたのに対して、漢文教師には毎月12両という、より高い給与を支給していた。前述したハラチン地域においても、漢文教師の給与は蒙文教師の給与より高かった。その理由について、蒙文教師は地元の人であり、漢文教師は中国本土から招かれた人であるからという可能性も考えられるが、漢文の習得が特に重要視されていたこともその理由の一つかもしれない。確かに、漢人向けの綏遠中学堂においては、綏遠城將軍貽穀らによって山西省などの中国本土から新式教育を受けた教師が招かれていた [王慧 2005: 20]。

それにしても、1908年時点のハラチン地域の教師や学生らに支給される給与や手当²⁷は、帰化城トゥメド地域より高額であった。ほぼ同じ時期の1907年に、ハラチン右翼旗の学堂に赴任していた日本人教師の鳥居龍蔵とその夫人の鳥居さきみこによる張家口からドロンノールに入る前の両替に関する記述「一兩は穴明き²⁸錢一吊七百三と申します。そして十錢とか廿錢とか五十錢とかなどの銀貨は取換へて呉れません。まア一元銀貨ならば、一吊一で換へて呉れます。」によると、「1兩 (= 1吊) = 703文」で換金されていた [鳥居さきみこ 1927: 593、ナヒヤ 2010: 71]。1吊は基本的に中国で銅錢1000枚 (文) を意味するが、地方によって1吊が何枚 (文) かというのは異なる。要するに、上記の「一兩は穴明き錢一吊七百三」という記述は、銀一兩が銅錢一吊に相当し、かつそれが703枚であるということの意味する。給与に関して言うと、アローハン 2016b: 45-46において、ハラチン左翼旗における蒙文教師の年間給与²⁹は200吊であり、漢文教師の年間給与は600吊であり、各学生の年間食事は100吊であったことを明らかにした。言い換えれば、ハラチン左翼旗における蒙文教師の給与は毎月約17吊 (兩) であり、漢文教師の給与は毎月約50吊 (兩) であり、学生の手当は毎月約8.3吊であった。それに対して、帰化城トゥメド地域における蒙文教師の給与は毎月7兩であり、漢文教師

²⁶ 同上。

²⁷ ハラチン地域の近代学堂については前述のようにアローハン 2016b で検討した。

²⁸ 「開き」の書き誤りかと思われる。

²⁹ アローハン 2016b では、教員の給与が年額か月額かについての検討が不十分であった。

の給与は毎月12両であり、学生の手当は毎月1両2銭であった。これで計算すれば明らかなように、ハラチン地域の教師や学生らに支給される給与や手当は、帰化城トゥメド地域より高額であった。上述のハラチン右翼旗の旗長ゲンサンノルブが日本人の陸軍軍人を招いた際には、給与として毎月銀150両を支給していた。それが清朝による日本人教員の平均招聘給与に比してやや低かったにしろ、ゲンサンノルブにとっては財政上の大きな負担となっていた（アローハン2016：105）。このような理由から、帰化城トゥメド地域で学堂を次々と多設することが可能となり、逆にハラチン地域では学堂を創設することによって、モンゴル王公らが財政困難に陥るといった現象につながったという可能性も指摘できよう。このような給与の差が生じた理由としては、ハラチン地域において清朝政府による平均給与に則した政策を取っていたのに対して、帰化城トゥメド地域においては、独自の低い給与額を決定することが許されていたからであるという可能性が高いであろう。

3. モンゴル人向け学堂の教科内容と管理体制

3.1 モンゴル人向け学堂の教科内容

清末において、清朝政府が最初にモンゴル人向けの教科書を出版した例は、1909年に東三省総督であった錫良が出版した『滿蒙漢三文合璧教科書』³⁰である。これは、清朝政府の学部が制定した漢文で書かれた初等小学堂教科書の重要な部分を満洲語とモンゴル語に翻訳して編集した教科書である。それ以前の例としては、ハラチン右翼旗で、ゲンサンノルブが学堂に日本人教師として赴任していた鳥居龍蔵に依頼して、日本の大日本図書株式会社で明治40（1907）年4月17日に印刷し、同年4月20日に発行した教科書³¹がある。この教科書は、モンゴル文で書かれ、修身、唱歌という内容に加え、ハラチンの地理や歴史等の内容を含んでいた。

以下では、それに対して、帰化城トゥメドのモンゴル人向け学堂でどのような教科書が使われ、いかなる教育が行われていたのかについて、史料を見てみよう。

帰化城土黙特初級小学堂³² 監督都 光緒三十三（1907）年初級小学堂が以下の物を受け取った。応用書〇³³ 什物等初級理化教示全冊、初級博物大意全冊、初級動物學全冊、初級筆算數學五部、地球儀一元、石板一打、鉛筆一打、石筆一匣、東亜三國圖一棒、天下最新圖一棒、粉筆一匣、支那大地圖一棒、中國歴史一部、以上の物を受け取ったことは間違いない。…承領官司事納斯洪阿 光緒三十三（1907）年十月³⁴

ここに出てくる教科書がどこで発行された物なのか現段階では不明であるが、この史料から分かるように、帰化城地域のモンゴル人向けトゥメド初級小学堂は教科書、地図や文具を受け取ってい

³⁰ 東京外国語大学附属図書館に所蔵されている。この教科書についての詳細な検討は林2014を参照されたい。

³¹ 東京外国語大学附属図書館に所蔵されている。

³² トゥメド旗の初級小学堂というのは、前述のモンゴル人向け初等小学堂のことである。

³³ 判読不能。

³⁴ 帰化城土黙特戸司事納斯洪阿の帰化城土黙特初級小学堂監督都宛咨文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「墨領購置課本地図等銀両」。档案番号80—12—48。

た。初級理化教示、初級動物学、初級筆算数学、中国歴史という教科書があることから、初級小学堂において、語学以外にも理系の授業や歴史の授業を行っていたことが分かる。歴史の授業では、ハラチン右翼旗のようにモンゴルの歴史を教えていたわけではなく、中国の歴史を教えていたようである。また、地球儀、東亜三国図、天下最新図、支那大地図という地図が利用されていたことから、清国やその隣国に関する地理的内容も教授されていたことが窺える。翌光緒34(1908)年5月付の「銀庫を経て北京から天下地輿全圖を一枚³⁵、東亜三國全圖を一枚、地球(地球儀)を一顆³⁶購入してきた。これを司³⁷に貼り出して、所属の民衆に周知させることは、とても重要な実務だ」と記す文書³⁸もある。この文書から、帰化城トゥメドでは中国本土で使用されていた教科書そのものを購入し、授業で用いていたことが窺える。また、授業で使用するだけでなく、管轄の属民に向けて地図を展示するようにしていたこともわかる。

さらに、教科内容についても、同じ史料から窺える。

管理土黙特学堂事務監督右翼六甲參領兼中公中佐領都

包頭初等小学堂が小学堂で使用する六種類の書籍を受け取ったことを記録して、その詳細を添付して願います。

示された通り受け取ったことに偽りが無いことは確實であるということをご司に知らせる。

受け取った書籍は左記の通りである。

最新初等小學國文教科書拾本	最新初等小學修身教科書拾本
最新高等小學地理教科書四本	最新高等小學中國歴史教科書四本
初等物理學教科書一本	筆算數學三本

承領官包頭小學堂司事前鋒校富興 光緒三十四(1908)年七月³⁹

この史料は、包頭初等小学堂が当該学堂で使用する教科書を受け取ったことを土黙特学堂事務監督に報告している文書である。その内容から見ると、国文、修身、地理、中国歴史、物理学、筆算数学の教科書を用いていた。これも上述した帰化城トゥメド初級小学堂の例と同様なので、帰化城トゥメド地域のほぼ全ての学堂において中国本土で使用されていた教科書をそのまま用いていたと断定して間違いなであろう。すなわち、満洲人旗人官僚による教育改革は、やはり中国本土における改革に一致する教育改革をモンゴル地域に広げたものであったと言えよう。このように、モンゴル人向けトゥメド初級小学堂において、漢文の学習が次第に満洲語やモンゴル語の学習にとってかわりつつあった〔王慧2005:22〕。

³⁵ 史料の原文には「一紙」と表記されている。

³⁶ 史料の原文には「一顆」と表記されているが、「個」の誤字かと思われる。

³⁷ 学堂を管理していた部所名「兵司」の省略であると思われる。

³⁸ 帰化城土黙特戸司司事納斯洪阿の帰化城土黙特初級小学堂監督都宛咨文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「墨領購置課本地図等銀両」。档案番号80—12—48。

³⁹ 同上。

上述した内モンゴル自治区を設立したことで有名な烏蘭夫の回想録によれば、烏蘭夫の生まれ育った村⁴⁰には、清朝の乾隆年間から山西省の漢人が移住してきていた〔烏蘭夫革命史料編研室編1989：1-2〕。こうした社会環境によって、烏蘭夫はモンゴル語を流暢に話せない〔楊2013：74-75〕まま育てられた。帰化城トゥメド旗のモンゴル人たちの多くは、この烏蘭夫のように清末頃から既にモンゴル語を話せなくなっていた。この問題が生じたのは、種々の社会的な理由もあるが、これらの中国式の教育計画とも何らかの関係があると考えて間違いないだろう。そして、結果として、帰化城トゥメド旗のモンゴル人たちは、更に母語から離れていったのであった。

他にも、鉛筆、粉筆、石筆、石板といった文具を受け取っていた。以下の史料で見られるように、高等小学堂で使用されていた文具の種類はもっと多かった。

帰化城土默特高等小学堂監督松 学堂諸学生が需用する筆○⁴¹数学十部石板三十六塊密達尺四十五桿、直錢板四十塊、曲錢板二十四塊、鉛筆六打、石筆一匣、粉筆一匣、洋紙十張、象皮四十五塊、規矩一匣等を確実に受け取った。(中略) 承領官佐領巴彥 光緒三十三年(1907)年十一月十六日⁴²

ここで言う高等小学堂とは、前述の蒙小学堂を改編した最初のモンゴル人向けの第一高等小学堂である。帰化城地域の学堂においては、学生らに上述したような手当を支給するのみならず、文具まで提供していた。

学堂の運営が順調に進められたのは、綏遠城將軍貽穀の施策によって促された結果である。前述したように1903年に、貽穀が綏遠城將軍兼蒙旗墾務大臣に任命されてから、下関条約などに伴う清朝政府の財政的負担を緩和する手段として、帰化城トゥメド地域やその周辺部で大規模な開墾が行われた。これがオルドスのアルビンバイラルらモンゴル王公をはじめとする反開墾運動を引き起こすに至ったにもかかわらず、最終的にはこれらモンゴル王公を従わせて、開墾を進めるかたわら、漢人を流入させて、多額の収入を得た⁴³。これらの収入の一部を学堂の運営に回すことによって、帰化城トゥメド地域で教育改革を行ったのである。

3.2 モンゴル人学生に対する管理体制

帰化城トゥメドでは、学堂以外にも、満洲人やモンゴル人向けの「時政講習所」という人材育成を目的とした機関が設けられていたことが下記の史料に記されている。

転送すること。軍都憲憲台會⁴⁴が設立した時政講習所に関して、本所の土默特からの学生賽沙

⁴⁰ 1906年12月23日に、烏蘭夫は内モンゴル西部のトゥメド旗塔布村（五つの村）で生まれた〔史料⑦烏蘭夫革命史料編研室編1989：1〕。

⁴¹ 判読不能。

⁴² 帰化城土默特戸司事納斯洪阿の帰化城土默特初級小学堂監督都宛咨文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「墨領購置課本地図等銀両」。档案番号80—12—48。

⁴³ Sodbilig1993、劉毅政1995、李2001等を参照。

⁴⁴ 現段階ではいかなる組織であるのか不明。

楚克の欠席日に対する上級機関からの処分を知らせる。軍都憲が講習所を設けたのは、満蒙に向けて人材を育成するためである。賽沙楚克が何回も勝手に欠席したことで、厳重な処罰を与えるべきであるが、時政講習所が設立されてまもなくのことだから、一度、大過⁴⁵(という警告)を付す、と(上級機関)から報告があったので転送する。

貴司が以上の通り施行していただきたい。

軍都憲が兵戸司に転送する。 宣統元(1909)年十一月⁴⁶

「時政講習所が設立されてまもなくのことだ」という記述から、この教育機関は宣統年間に入って初めて設けられたと考えられる。機関名から見ると、当時の社会における出来事について、満洲人やモンゴル人の学生を集めて一定期間講習を受けさせていたようである。ここでは、賽沙楚克というモンゴル人学生の欠席に対して「大過」を付したことを、軍都憲が講習所を管理する兵戸司らに転送している。欠席に対する「大過」という警告から見ると、満洲人やモンゴル人学生に対して強制的に受講させていた講習所であると思われる。講習内容については不明であるが、「満蒙に向けて人材を育成する」のが目的であったと書かれている。辛亥革命前夜、山西省の同盟会がトゥメドで宣伝活動を行った際に、トゥメド蒙小学堂を卒業した雲享は同盟会に入会し、漢人学生と一緒に革命活動に参加していた[王慧2005:22]。このような出来事も「時政講習所」と何らかの関係があるのかもしれない。いずれにせよ、以上のような種々の学堂がその後のモンゴル人知識人の輩出に大きな影響を与えたことは間違いなさであろう。

学生に対する同様の処罰例は、帰化城トゥメド内の他の学堂の事例でも見られる。綏遠城には陸軍小学堂を管理する監督署が設けられたが、その監督下にある帰化城トゥメドのモンゴル学堂を管理する兵司が、下記のように、モンゴル人佐領へとモンゴル人学生向けの厳しい処罰を伝達している。

綏遠陸軍小学堂監督署の監督下にある両翼の蒙古協領関防事務俟補協領後加二品銜佐領が移送する。(中略)各教員と相談して定めた十七条からなる処罰章程を今年の開校日から実行することになった。規則を守らなかった者から罰金を取り、勤勉な学生や成績の優秀な学生を奨励する。本学堂が定めた罰金新章程は、人材育成を激励するためである。本城(綏遠城)や右衛の学生の罰金をその学生の手当から支払うことにする。

貴旗の甲乙の二クラスの学生のうちの烏勒興額等の八名は学校が始まってから数日間、一度も通学していない。これらの学生に対する罰金に関する詳細を添えて送る。(中略)

土黙特兵司

宣統三(1911)年二月十三日

左記

甲クラスの学生烏勒興額、達敏泰、豊紳額の三名が六日間欠席したため、毎日の罰金は(中略)

⁴⁵ 学生に与える警告の名である。「大きな過ち」という意味。

⁴⁶ 軍都憲の兵戸司宛咨文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「申報學員賽沙楚克曠課日久予以記過処分」。档案番号80—12—51。

学生巴図が九日間欠席したため、毎日の罰金は銀…⁴⁷合計銀…⁴⁸乙クラス学生榮玉、崇権、来全の三名が六日間欠席したため、毎日の罰金は銀…⁴⁹合計銀…⁵⁰学生蘇魯岱が十日間欠席したため、毎日の罰金は銀…⁵¹合計銀…⁵²(後略)⁵³

これは、モンゴル人学生向けの「十七条からなる処罰章程」を定め、モンゴル人学生に処罰を与えるという文書である。この章程は、学堂の規則を守らない学生から罰金を取り、勤勉な学生や成績の優秀な学生を奨励することによって、モンゴル人向けの教育を強化しようとする規程である。罰金を取る場合、学生らの手当から取ることもあったことがわかる。この史料では残念ながら罰金の金額が読み取れないが、欠席の日数によって異なっていたようである。また、その後の宣統3(1911)年3月に、蒙小学堂を管理する兵司が綏遠城陸軍学堂に「(前略)上記の学生は学堂の休暇期間に帰省中だったので、新罰金章程のことについてまだ理解していないと思う。分かっておれば、欠席しないと思うので、今回の罰金を減免してくれないか。(後略)」⁵⁴と返信しているので、上記モンゴル人学生らから実際に罰金をとったかどうかは不明である。

ハラチン地域では、学生人数を確保するための対策をたてていたが、このような処罰の事例は見られない。それに対して、帰化城トゥメド地域では、欠席に対して処罰を与えたり、あるいは罰金を取るなどの規則があって、近代的学堂教育が、より厳しい管理の下で行われていた。このような処罰規則から窺える学堂の強制管理によって、学生の人数を確保することができた可能性を指摘することができる。満洲人旗人官僚が立案した近代学校教育を現地モンゴル人の間で順調に進めるといふ計画も、このような方法で実現できたのかもしれない。

結論

本稿での検討によって、清末の内モンゴル西部の帰化城トゥメド地域において、モンゴル人向けの初期の教育が始まるのは、満洲人旗人官僚たちによって促された結果であったことがわかった。この点で、ハラチン右翼旗の事例と大きく異なっていたことが確認できる。要するに、帰化城トゥメド地域における教育の近代化は、清朝政府から派遣された旗人官僚が辺境地帯の安定を考慮した上で、モンゴル人を効率的に治めるために、清朝政府の「新政」に基づいて、近代学校教育をモンゴル人の間に広げようとしたものであった。モンゴル人向け学堂の教科内容を見ると、帰化城トゥメド地域では満洲語、モンゴル語、漢文の教授等に加えて、中国史や算数などの科目もあり、中国本土

47 判読不能。

48 判読不能。

49 判読不能。

50 判読不能。

51 判読不能。

52 判読不能。

53 土黙特兵司の陸軍小学堂監督署のモンゴル人佐領宛咨文。帰化城トゥメド左旗档案局所蔵の漢文史料。「移送誤課学生罰銀数目的移文」。档案番号80—12—87。

54 同上。

で使用されていた教科書そのものを購入して、中国本土とよく似た教育が行なわれていた。モンゴル人向けの教育と言っても、漢語教育が重視されていたわけである。また、ハラチン地域の教師や学生らに支給される給与や手当は、帰化城トゥメド地域より高額であった。両地域においてこれほどの差が生じた理由としては、ハラチン地域が清朝政府による平均的な給与に則した対策を取っていたのに対して、帰化城トゥメド地域においては、独自の低い給与額を設定していた可能性が高いと考えられる。近代的学堂の運営については、帰化城トゥメド地域での教育は、より厳しい管理下で行われる半強制的な側面を有していた。

このように、清末の「新政」に伴って帰化城トゥメド地域で考慮されていたのは、何よりも、安定した辺境地帯を確保することであった。すなわち、教育の目的としては、近代学校教育を通してモンゴル文化の復興を図ることではなく、新しい国民や軍隊を編成するための教育であったと考えられる。

また、帰化城トゥメド地域における近代学校教育は、近隣の中国本土地域よりもやや遅れた時期に始まっていることがわかる。例えば、帰化城トゥメド地域からもほど近い直隸省においては、1902年1月に直隸総督に就任した袁世凱が、各方面の新事業に必要な人材の養成を目指して、省城保定に武備学堂、參謀学堂、警務学堂、農務学堂、軍医学堂、工芸学堂、師範学堂を相次いで設立したことが分かっている [阿部1993: 132]。これら中国本土地域における近代学校教育の振興は、内モンゴルの帰化城トゥメド地域に比べてはるかに高いレベルの進展を見せている。ただ、そうであったとしても、本稿で明らかにしたように内モンゴル全体の中で見ると、帰化城トゥメド地域は近代学校教育の導入という側面において極めて先進的であったことが改めて確認できるかと思う。本稿で述べた蒙小学堂は、後に高等小学堂に改編されて中華民国期まで続く。これらの学堂がその後のモンゴル人知識人の輩出に大きな影響を与えたことは間違いないであろう。

ただその一方で、清朝の乾隆年間から始まった漢人移住など種々の社会的な理由もあろうが、帰化城トゥメド地域のモンゴル人たちは、これらの中国式的教育計画の中で、結果として、更に母語から離れていったのであった。

こうして帰化城トゥメド地域において近代学校システムがようやく定着するや否やの時期に、中華民国時代が始まるのである。今後の課題としては、モンゴル地域を管理する行政機関が清朝の理藩院から中華民国の蒙藏院へと変わる政治体制の変化の中で、上述した帰化城トゥメド地域のその後の教育事業がどのように展開され、蒙藏学校との関連がいかなるものであったのか、などの問題があげられるであろう。

〔参考文献〕

史料

- ①中国第一歴史档案館所蔵の档案史料
- ②内モンゴル自治区トゥメド左旗档案局所蔵の档案史料
- ③陳志明主編2006『土默特歴史檔案集粹』内蒙古人民出版社：呼和浩特
- ④沈雲龍編・貽穀著1974『綏遠奏議』（『近代中國史料叢刊』第11輯：103）文海出版社：臺北

- ⑤高賡恩纂(清)『光緒歸綏道志(一)』(『中國地方志集成:內蒙古府縣志輯(8)』、2012)鳳凰出版社:南京、上海書店:上海、巴蜀書社:成都
- ⑥汪国鈞編・瑪希、徐世明校注2006『蒙古紀聞』內蒙古人民出版社:呼和浩特
- ⑦烏蘭夫革命史料編研室編1989『烏蘭夫回憶錄』中共党史資料出版社:北京

日本語研究文献

- 阿部洋1993『中国近代学校史研究—清末における近代学校制度の成立過程』福村出版:東京
- アローハン2016a「グンサンノルブによる日本陸軍軍人招聘—伊藤柳太郎が招聘された経緯と背景—」『内陸アジア史研究』31:93-117
- 同2016b「清末の「新政」と内モンゴル・ハラチン地域における「近代教育」の発足—ハラチンの右翼旗と左翼旗の近代学堂創設をめぐる—」『日本とモンゴル』133:32-53
- 鳥居きみこ1927『土俗學上より觀たる蒙古』六文館:東京
- 中見立夫2013『滿蒙問題』の歴史的構図』東京大学出版会:東京
- ナヒヤ2010「清末における「教育興蒙」について—内モンゴル東部を中心に—」『アジア地域文化研究』7:61-81
- 矢野仁一1925『近代蒙古史研究』弘文堂書房:東京
- 楊海英2013『中国とモンゴルのはざまで—ウランフーの実らなかった民族自決の夢』岩波書店:東京

中国語研究文献

- 郝玉峰1989『烏蘭夫伝(1906-1947)』內蒙古人民出版社:呼和浩特
- 胡玉花2011「清末民初綏遠城駐防研究—以綏遠城將軍的職能演變為主要線索」(內蒙古大学修士論文)
- 李玉偉2000「貽穀在綏遠城將軍任內的編練新軍」『內蒙古大学学报』(人文社会科学版)32:27-31
- 同2001「略論清末綏遠地区的蒙墾」『內蒙古社会科学』(漢文版)22:47-50
- 林士鈺2014『滿蒙漢合璧教科書』與清末蒙古教育改革初探』『輔仁歷史學報』(台湾)32:123-174
- 劉麗君2004「清代歸化城土默特地区教育事業刍議」(內蒙古師範大学修士論文)
- 劉櫻2011「綏遠城將軍貽穀與滿蒙漢三軍」『档案与社会』6月:42-44
- 劉毅政1995「丹丕爾抗墾起義始末」『內蒙古師大学報』(哲学社会科学版)2:12-17
- 孟彩霞2010「民国時期的北京蒙藏学校及其革命活動」(內蒙古師範大学修士學位論文)
- 王慧2005「晚清至抗日戰爭前歸綏地区学校及學運的發展—以四所学校為例」(內蒙古大学修士論文)
- 王有亮・路寧2008「清代歸化、綏遠城的書院及其歷史地位」『內蒙古師大学報』(哲学社会科学版)37(2):50-53
- 烏仁其其格2007『18-20世紀初歸化城土默特財政研究』民族出版社:北京
- 曉克・于永發・王奎元2008『土默特史』內蒙古教育出版社:呼和浩特
- 札奇斯欽2007『罗布桑車珠爾伝略』(『赤峰市文史資料』第八輯)內蒙古人民出版社:呼和浩特
- 同1981『喀喇沁王貢桑諾爾布与內蒙古現代化』(『中華民國建国史討論集』第二冊):台北
- 張建軍2012『清末民初蒙古議員及其活動研究』中央民族大学出版社:北京

モンゴル語研究文献

Sodbilig1993、 “arbinbayar türügütei yeke juu-yin wang güng noyad alban tariya erkelekü-yi esergüüčegsen ni” 『蒙古史研究』 第四輯：133-157

SUMMARY

In this paper, I discuss the establishment and management of the modern school education in the *Guihuacheng Tümed* region of Inner Mongolia under the new policy of the late *Qing* dynasty. The region wasn't managed by the hereditary Mongolian noble, but was managed by the bureaucrats who had been dispatched from *Lifanyuan* 理藩院 of the *Qing* dynasty. I examined the school education for Mongolians in the *Guihuacheng Tümed* region from the viewpoints of the schools founded by the Manchu bureaucrats, using materials in the First Historical Archives of China and the Historical Archives of Inner Mongolian Tümed Left Banner. I tried to survey the schools established and managed by the Manchu bureaucrats *Yi gu* and *Wen zhehui*. Then I examined the issues involved to the schools for Mongolians in other words, the management, the expenses, the teaching subjects and the management of students. In conclusion, the purpose of establishing modern schools in the *Guihuacheng Tümed* was to govern the Mongolia as a stable remote area under the new policy of the late *Qing* dynasty. The purpose was never to develop the Mongolian culture.

付記

本稿の内容は、公益財団法人松下幸之助記念財団研究助成金（助成期間：平成26年10月1日-平成27年3月31日）による研究成果の一部として、「満族史研究会第30回大会」（於日本大学、2015年5月30日）にて口頭発表を行っている。また、本稿は日本学術振興会平成27年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。